

ミツバチプロジェクト始動！ 生徒が養蜂したミツバチが 地域や社会とつながる「パスポート」に。

定時制高校が取り組む
ユニークなプロジェクト学習。

午前・午後・夜間の三部定時制で、単位制の市立札幌大通高等学校は、平成20年（2008年）の開校当初から「社会に開かれた教育課程」をコンセプトに掲げています。キャリア教育、PBL（Problem Based Learning）、プロジェクト学習、問題

解決型授業などに取り組む、学校外の方々と連携する教育実践を数多く行ってきました。

平成24年（2012）からは、シティズンシップを育成する「ミツバチプロジェクト」に取り組んでいます。ミツバチの飼育から蜂蜜・菓子などの商品開発、札幌大通公園や東京銀座での販売まで、高校生が主体的に担う、教科横断的なプロジェクト学習です。そこから誕生した「天然蜜食べ隊 初夏の百花蜜」は、最も美味しい蜂蜜を選ぶコンテスト「ハニー・オブ・ザ・イヤー」（平成30年）で最優秀賞に選ばれたほど本格的です。審査員から「花の香りが強く、香りも良い。非常になめらか」と評価されたこの蜂蜜は、札幌大通高校の巣箱から北海道大学の植物園まで飛んで行って原生林に自生する花々の蜜を採取しているから美味しいのです。



北海道の原生林の姿を残す北大の植物園。



札幌大通高校が作る「天然蜜食べ隊 初夏の百花蜜」。背景の森は約13haの北大植物園。

「ミツバチプロジェクト」が学校と社会をつなぐ。

「ミツバチプロジェクト」には、授業や委員会や部活動として、または個人の立場で教員も生徒も柔軟に関わることができます。さらに、高校に隣接する生涯学習センターで学社融合講座が開かれ、市民の受講生も養蜂にボランティア参加することもあります。養蜂をはじめ、商品デザイン、販売場所の確保など、ミツ



巣箱も生徒たちが製作したもの。



校内での養蜂の様子。

生徒の感想

ミツバチプロジェクトに関わりたと思ったきっかけは二つあります。一つ目は、先輩たちが忙しくも楽しそうに総合実践（商品開発・マーケティング・販売実習）の授業で活動している様子を見たり話を聞いたりして、私もチャレンジしたいと思いました。二つ目は、アルバイトなどの社会経験を全くしたことがなかったので、ものを販売したり接客をしたりしてみたいからです。実際に経験してみるとアルバイトなどでは経験できないような、自分たちで考えて行動しなければならないことがたくさんありました。

バチが社会とつながるパスポートとなってきたのです。

プロジェクトの情報発信は生徒の運営するメディア局が担っています。蜂の飼育状況から関係者へのインタビュー、グルメコンテストの模様まで丁寧取材し、ブログや地元FMで発信しています。その甲斐あって、このプロジェクトに興味を持って札幌大通高校を受験する中学生も増えてきたといえます。

ミツバチから広がる学びの場。地元ホテルと連携。

プロジェクト4年目は、生徒が有志で参加する学修プログラムがいくつも生まれ、新たな連携も始まりました。ミツバチプロジェクトでのつながりが、次のつながりを呼んでいるのです。



センチュリーロイヤルホテルのシェフと真剣に打ち合わせ。

札幌大通高校は地元資本のセンチュリーロイヤルホテルと「包括連携と協力に関する協定」を結びました。とあるプログラムでホテル支配人と知り合い、蜂蜜を試食してもらい同校のキャリア教育について話したところ、朝食ビュッフェに蜂蜜が採用されました。ホテルへの職場見学やインターンシップも受け入れてもらい、日常的な信頼の積み重ねに

より協定締結へと発展しました。書道部の生徒が書いた作品がホテルの宴会パンフレットに採用されたり、ホテルのシェフから「高校生チャレンジグルメコンテスト」の出品理へアドバイスを受けたり、商品や企画開発など互いに協力し合っています。



商品のデザインもネーミングも毎年生徒が考える。



立地環境に恵まれた札幌大通高校。



100以上の出品の中から札幌大通高校の蜂蜜が最優秀賞に選ばれた。

道外進出、 東京銀座でも販売！

平成28年(2018)には東京・銀座で開催された「はちみつフェスタ」に出店し、生徒2名が蜂蜜販売にチャレンジしました。これまで北海道内での販売では商品自体や学校について聞かれることがほとんどでしたが、東京では北海道や札幌についての質問が多かったと言います。「生徒にとっては、自分たちが暮らす地域について見つめ直すよい機会に

西野功泰先生の言葉

3月のある日、校舎内の巡視をしていると、ミツバチプロジェクトに関わる授業がいくつか行われていました。商業科の総合実践ではプレゼン大会に向けた練習が大詰めを迎えていました。プレゼンでは販売実習やコンテスト出場を通して学んだことが発表されます。この発表が新しい生徒たちの気持ちに火をつけ、次年度へとバトンが引き継がれています。

隣の養蜂場では、越冬のため屋内に大切に保管していた巣箱を取り出して、教員とボランティアの方々から蜂の生存確認をしているところでした。新聞記者とメディア局の生徒たちの姿もあります。

こうした風景が校内に今や定着した背景には、教科の枠を超えた授業実践、地域での課外活動、外部連携、そして生徒と教員の挑戦の積み重ねの成果だと実感しました。

進路指導担当・平野淳也先生の言葉

3部定時制の本校では、貧困や発達障害、引きこもりという問題を抱える子どもたちも多く、「この子たちへ何かできることはないか?」と思い、学校外の福祉系NPOと連携することを始めました。プロジェクトに取り組む生徒たちは西野先生が引っ張り、そこで悩んだ生徒やさまざまな課題を抱える子どもたちは私が担うというような分担をしています。

私は今、「校内居場所カフェ」に取り組んでいます。企業や福祉系NPOなど外部の人に日を定めて来てもらい、子どもたちと触れ合って、話し合う場を本校の玄関に入った広場的な場所で開催しています。

この子どもたちは学校でのコミュニケーションで挫折したという子が多いのですが、外部の大人たちと接触して楽になり、少しずつ心を開いて悩みを話し合えるようになります。福祉系NPOだけでなく企業も人が足りないのが、大通り高校から就職してくれる子がいればありがたいという気持ちもあって協力してくれています。このような対話の中から生徒が社会で働くというイメージを育んだり、就職後もサポートしてくれる福祉系NPOと出会うことができるのです。

もなったようです」とプロジェクトを担ってきた西野先生はふり返りません。

世界中の蜂蜜が集められた会場内を興味津々に歩き回った生徒たちは、「こんなパッケージの蜂蜜がありました!」「あそこのブースのレイアウトが参考になった」など、生徒自ら探究を深めたようです。2日間の出展期間中、生徒は教員の助けを借りずに販売をやり抜きました。4年生の生徒は、ミツバチプロジェクト

に関わる講座をすべて受講していたため、環境・植物・調理・養蜂の基礎知識を身につけており、来場者から寄せられる蜂や蜂蜜などのあらゆる質問に対応することができていました。その姿は大変頼もしく、ミツバチプロジェクトの学びの可能性が凝縮されていました。

(参照:ミツバチプロジェクト実践報告書)

◎はちみつフェスタ

蜂蜜の資格「はちみつマイスター」を運営する一般社団法人日本はちみつマイスター協会主催。フェスタでは世界各地の蜂蜜100種が購入できる他、蜂蜜の様々な使い方が学べる。



銀座のはちみつフェスタで商品を詳しく丁寧に説明する生徒たち。

PBLを活かすための カリキュラム・マネジメント。

「ミツバチプロジェクト」などのPBLを、札幌大通高校ではどのようにカリキュラムに落とし込んでいるのでしょうか。

それまで札幌大通高校では、4年間で卒業できないケースや進路未

定のまま卒業する生徒が多くいるといった定時制高校ならではの抱えていました。主な原因は、対人関係やコミュニケーション、不登校などです。地域社会の中で、生徒たちがどのように自己理解し、キャリア

アبرانを立て、自立した姿を未来に描けるようになるか。学校を巣立っていく生徒たちに学ばせたいことは何か。キャリア教育を軸に教育課程の再編が行われました。

そこで浮上した

のが、PBLの活用です。札幌大通高校では100を超える科目の中から、生徒自身が興味関心に合わせて時間割を作成します。地域連携・教科横断型アクティブラーニングの一つである「ミツバチプロジェクト」は、既存の授業に「蜂蜜」や「ミツバチ」が教材として取り込まれ、カリキュラムが作られています。

こうしたキャリア探求型のPBLのカリキュラム・マネジメントは、合同会社アニマドールと協働でつくられています。アニマドールは、高校生チャレンジグルメコンテスト事務局を立ち上げ時に担っています。メンバーには大学や民間企業、デザイナーなどさまざまな専門家が

教科横断型「ミツバチプロジェクト」～生産から広報まで～

| テーマ | 教科 | 実践 |
|--------|--------|----------------------|
| 1 生産 | 理科 | 動物の生態(ミツバチの観察・飼育・採蜜) |
| | 芸術科 | 工芸(巣箱、継箱、巣枠などの道具作り) |
| 2 商品開発 | 情報・商業科 | 総合実践(商品開発・マーケティング) |
| | 家庭科 | フードデザイン(コンテストへの参加) |
| | | 発達と保育(園児への食育) |
| | PTA | 蜂蜜を使ったお菓子作り研修会 |
| 3 加工 | 国語科 | 国語総合(商品名考案) |
| | 外国語科 | 英語での商品パンフレット作成 |
| | 芸術科 | 書道(ラベルデザイン) |
| | 美術部 | ラベルデザイン |
| 4 販売 | 情報・商業科 | 総合実践(販売実習) |
| 5 広報 | メディア局 | 校外外での取材・情報発信 |

揃っており、大通高校の西野先生もメンバーの一人です。

同校のPBLのテーマは、生産者とカスマーをつなぐ食農教育体験です。生徒たちは自分の興味に合わせてアニマドールでの4つのコース(ファームイン、販売体験、商品開発体験、広報PR体験)から選択します。教材はどれも「本物」で、現場のプロフェッショナルから学ぶことができます。協働でのカリキュラム創造は、地域連携の新しいあり方になりました。

◎アニマドール

食育プログラムの専門家育成を行う。アニマドール(生産者と生活者をつなぎ、食の大切さを伝えるプロフェッショナル)の育成と食育プログラムの確立、北海道の一次産業の活性化を目的としている。



イベントを通して子どもたちへの食育も行う。